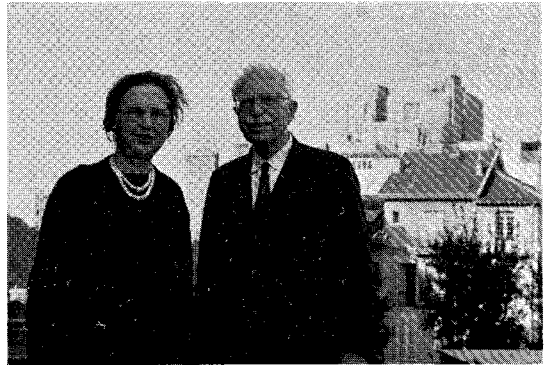


Nicolas Stoyko 教授

飯島重孝*

1976年、グルノーブルで開かれた第16回国際天文学連合 (IAU) 総会も半ばを過ぎた8月31日、第19 (地球回転) および第31 (時) 委員会の合同会議の冒頭で、第31 委員長の H. Enslin 博士から一つのメッセージが披露された。N. Stoyko 教授からのもので、自分はいま病床にあってこの会合に出席出来ないのは大変残念である、皆さんにどうぞよろしくという趣旨であった。私も含めて大半の人達がこの時始めて N. Stoyko 教授の病気を知ったようである。H. Enslin 博士が代表してお見舞状を送るということで一同拍手の後、予定の議事に移った。帰国後、自分でもお見舞状を書こうと思いがながら、ついこの頃となっていた矢先、10日始めに夫人の Anna Stoyko 博士から一通の訃報を受取った。N. Stoyko 教授が、長い病床生活の後に、6月19日、82才でついに逝去され、9月22日に極く親しい者だけで葬儀をとり行ったという内容であった。通知状の中で、Monsieur Nicolas Stoyko と書かれた名前の下に、パリ天文台名誉教授、経度研究所名誉会員、Légion d'Honneur 勲章の受章者という3行が添えられていた。私は深い哀悼の意をこめて早速お悔み状を Anna 夫人へ送った。お見舞状がお悔み状に変わらうとは全く思いがけないことであった。

N. Stoyko 教授は1924年パリ天文台へ入台、観測者として研究の第一歩を踏み出しておられる。IAU の誕生は1919年、国際報時局 (BIH) は翌1920年に発足している。教授は入台と同時にこの BIH の局員を併任した。多分31才であったと思われる。生粋のフランス人ではなく、白系ロシアの出身ということである。そういえばいつかの手紙の中で、私は B.A. Orlov 教授の教え子でという一節を思い出す。その Orlov 教授も1963年になくなって今はない。N. Stoyko 教授は以後 BIH の仕事に専心、1932年頃から BIH の機関紙である Bulletin Horaire に確定世界時関係の報告を担当した。1938年にはパリ天文台助教授、1944年に A. Danjon 教授がパリ天文台長兼 BIH 局長に就任された年から、パリ天文台教授、天文時部長と共に、BIH の主任、つまり実質上の BIH 局長に就任された。以後1964年の御退官まで40年の長期にわたり一貫して BIH の仕事を中心に、地球回転の研究を意欲的に追求された。この後は B. Guinot 博士がこの仕事を引継ぎ、Danjon 教授が1967年になられた後は、BIH 局長として活躍されていることは御承知の通りである。



夫人の Anna Stoyko 博士が1938年頃から BIH における共同研究者として登場してくる。IAU の第31委員会のメンバーとして、いつも A. Stoyko, N. Stoyko とお2人の名前が連ねられた、いわばおしどり学者としても有名であった。この度、夫君を失った Anna 夫人の深い悲しみが察せられる。

教授の研究は常に独創的で、観測面から地球回転に関する新発見を次々と発表された。例えば1936年発表の地球自転速度の年周変化の発見は画期的なもので、これには当時の振り時計と世界時の比較が用いられた。その後、1950年には水晶時計との比較を用いてこれを再確認している。1942年には経度の永年変化、後に云う大陸移動の研究をいち早く発表している。1951年発表の地磁気の永年変化と ΔT (暦時-世界時) の見事な相関関係の発見は、地球自転の大規模不規則性の謎を解き明かす重要な鍵を与えるものと思われる。1956年から、国際天文学連合の決議を経て発足した世界時、UT0, UT1, UT2 の区別や、このために必要な経度変化の補正、 $\Delta\lambda$ ($=UT1 - UT0$) および地球自転速度の季節変化の補正、 ΔT_s ($=UT2 - UT1$) などは、Stoyko 教授夫妻の枚挙にいとまない研究成果の結実といっても過言ではない。Stoyko 教授は今日の BIH の基礎を築き上げた人である。いま訃報をきくに当り、まさに巨星地に落つ、というか巨人、巨星として昇天という感慨ひとしおである。

N. Stoyko 教授は、1963年9月、第14回国際電波科学連合 (URSI) 総会が東京で開かれた折、日本を訪れておられる。東京天文台も、その時の見学先の一つに選ばれ、教授を含めて30~40人の URSI 参加者を受入れた。東京天文台では、宮地台長が退官されて広瀬台長に代った年である。この日、虎尾天文時部長と松波さんの3人で、Stoyko 教授を吉祥寺のさる日本料理店へ夕食に

* 東京天文台

招待したことを思い出す。教授は英語が不得意で、フランス語とチャンポンでぼつぼつと語り合ったものである。ポケットから一人娘のお嬢さんの写真を取出して見せてくれた。

2 回目に Stoyko 教授にお会いしたのは、1972 年 10 月、私がパリ天文台に 1 週間ばかり滞在した折である。教授はすでに退官され、名誉教授の資格で毎日出勤して来られ、御夫妻でささやかな研究室にとじこもり研究を楽しんで居られた。この時、私の突然の訪問をことのほ

か喜んで下さった温顔がいまも忘れられない。写真はこの時、パリ天文台屋上で撮ったものである。

教授へ宛てた英語の手紙は、必ず自筆のフランス語の手紙となって返信された。特徴のある字体ではあったが、構文は私にも比較的判り易いように気が配られていた。もうこれからは、こんななつかしい手紙を受取る機会はさらさない。このささやかな一文をかりて、心から哀悼の意を捧げると共に、教授の御冥福をお祈りする次第である。

掲 示 板

東京大学理学部天文学教室公募

下記により公募いたします。希望者の応募、適任者の推薦をお願いいたします。

1. 公募人員……教授 1 名
2. 専門分野……天文学
3. 就任時期……昭和 52 年 5 月以降のできるだけ早い時期
4. 提出書類……履歴書、研究論文リスト、推薦書(他薦の場合)。
5. 締切期日……昭和 52 年 2 月 20 日
6. 宛 先……(〒113) 東京都文京区弥生 2-11-16
東京大学理学部天文学教室主任

海野 和 三 郎

京都大学理学部宇宙物理学教室助教授公募

下記により助教授 1 名を公募致します。

京都大学理学部宇宙物理学教室主任

加藤 正 二

記

1. 公募人員 助教授 1 名
2. 専攻分野 天体物理学
3. 提出書類 履歴書、研究歴、論文リストおよび主要論文別刷、今後の研究計画書(着任希望時期を含む)
4. 公募締切 昭和 52 年 3 月 15 日
5. 宛 先 京都市左京区北白川追分町 (〒606)
京都大学理学部宇宙物理学教室

加藤 正 二

書 評

教師のための天文学

北村正利 監修・尾形 斉 著

(B5 版・本文 171 頁・付図 21 枚・恒星社版・定価 3,500 円)

理科教育の中で天文の指導は最も困難なものの一つで

はなかりうか。実際に指導に当る教師を対象にした研修の場として、都道府県単位に教育センターが設置されている。しかしそのセンターでさえ満足に研修できるような状態ではないようである。天文月報には、毎年春秋の天文学会と時を同じくして開催される天文教育懇談会の記事が掲載されるが、これを見ても天文教育がいかに困難であるかをうかがうことができる。

本書は、著者が昭和 51 年 3 月末まで勤務されていた神奈川県立教育センターでの経験を元に書かれたものである。

第 1 章：空と星座，第 2 章：地球，第 3 章：恒星・月・太陽の日周運動，第 4 章：太陽，第 5 章：月，第 6 章：惑星と太陽系，第 7 章：恒星と銀河系，第 8 章：天体望遠鏡の各章と、付録から成っている。

第 1 章では、空の色に始まり空から得られる情報、屋間の星、星座の話へと続く。第 2 章では、地球の曲率、地球の大きさ、地球の自転・公転の証拠、質量の測定などが説明されている。以下各章について、それぞれの範囲について簡単な数式を用いながら、図と表や実験装置(自作の可能なものを含む)により解説されている。随所に見られる実験装置は、著者独自の工夫によるものも多く、実際に大いに役立つものであろう。

さらに巻末に付けられた付録の内、同定用主要星座の 8 種は、透明ビニール板などに書き写すと、目から 30 cm 離して星空にかざすことにより目の焦点調節は必要であるが、わずかの間に星座の同定を可能にするであろう。東経 140 度の地における毎月 1 日の 20 時の方向が、図の周りに記入してあり大変便利であろう。その他、4 等星より明るい星を記入した星図、赤道座標から地平座標への変換図、赤道座標から黄道座標への変換図があり、さらにウルフネット(ステレオ方眼紙)も加えられている。

初版のせいであろうが、ときどき目につくミスプリント(例えば 65 頁の下から 7 行目の、赤経 4 時分は 4 時間分ではないか)は残念である。また項目が多いのでやむをえなかったのであろうが説明にやや飛躍が感じられるところも散見された。

結論としては、教育の現場にある教師の立場をよく理